

香りの不思議

松本侑壬子・ジャーナリスト

1985年、ドイツで1冊の小説が爆発的な人気を博した。日本でも翻訳出版されたが、訳者の池内紀氏は「あまりに面白いので、その日のうちに訳す文しか読まなかった」という。私も読んでから20年もたつのに、あの面白さが忘れられない。香りの不思議、香りの魅力に抱きすくめられたようだった。本作品はその映画化である。わくわくせずにはいられようか！

舞台は1738年のパリ。セーヌ河畔に並ぶ魚市場の悪臭の中で主人公ジャン＝バティスト・グルヌイクが産み落とされることから始まる。

当時のパリは、ごみ、糞尿、廃棄物などがいたるところに捨てられ非衛生で悪臭紛々、それに混じって焼きたてのパン、ワイン、花、そして香水などいい香りも漂い、活気とあらゆる臭いに満ちていた。

社会の最下層で孤児として育ったグルヌイクは、何キ口も先の匂いを嗅ぎわけられるという並外れた嗅覚をもっていた。13歳で売られた先の革なめし屋で青年（ベン・ウィショー）となるが、ある日雑踏の中で運命の香りとお会う。辿っていくとそれはアンズ売りの少女だった。彼女の香りに包まれて、グルヌイクは生まれて初めて幸福とは何かを知った。目に見えぬが人の心をごっしりと捕らえて包む至福の香り。しかし、怯えた少女の悲鳴を抑えようとして、誤って死なせてしまう。少女の命と共に、愛の香りも消えてしまった。

グルヌイクは少女の香りを再現した香水を1滴でも作り出すことこそ、自分の天命だと悟る。そして、高名な香水調合師（ダスティン・ホフマン）に弟

子入りをして腕を磨きながら香水の名作を次々に作り出すが、死んだ花からではなく“生き物”の香りを取り出すための高度な技術を求めて、香水職人の町グラーヌへ。町の入り口で、再び運命の香りとお会う。裕福な商人の娘で豊かな赤毛の美少女ローラ（レイチェル・ハード＝ウッド）だった。

平和な町で次々に発見される若い女性の遺体。豊かな赤毛を丸坊主に刈り取られているほかは、損傷はない。孤独な犯罪者の狙いも動機もわからぬままに、必死で娘を守ろうとする父親の闘い。意外なところから犯人が見つかるのだが…。

原作ではなぜか中年太り気味の醜男を想像していたので、映画のグルヌイクのすらりと少年っぽさの残る美男ぶりは意外だった。若く美しい娘に音もなく近づく様子はまるでしなやかな野獣のようだ。大それた犯罪を重ねるが、変質者にはちがちな性的な臭いはなく、まるで修業者のようにただ一点、この世にない一滴の香りを作りたいという願いしか頭にない。自分自身には体臭がないという悲劇性も、どこか人間離れしている。犯罪者ながら、哀れさも併せもつ運命の男、といった風情である。それは、クライマックスの処刑シーンで見るとあっと言わせ、予想もしなかった情景に口あんぐりとさせるどんでん返しの予兆のようでもある。

見事に香りの映像化に成功したのはドイツのトム・ティクヴァ監督。恋人の命を救うためにベルリンの町をひた走った赤毛のローラの話『ラン・ローラ・ラン』（1998年）で一躍世界に名を馳せた才人である。



ドイツ映画（147分）／トム・ティクヴァ監督

『パフューム ある人殺しの物語』

3月3日より全国松竹・東急系にてロードショー

